

広池千九郎の人間観

——ホモ・パチエンスとホモ・サピエンス——

水野 治太郎

目次

- 一、はじめに
- 二、病者の心
 - (一) 不安と苦悩
 - (二) 罪意識
 - (三) 病人の感性
- 三、ホモ・パチエンスの構造と課題
 - (一) V・フランクルの苦悩論
 - (二) 広池におけるホモ・パチエンスとホモ・サピエンス
- 四、結び

一、はじめに

我々の人生には春のように希望に満ち充実した時を過ごすこともあれば、冬のように暗いじめじめした希望の持てない時を過ごすこともある。人のライフサイクルを見れば、一度や二度は危機的状況が訪れる。受験の失敗、結婚の失敗、離婚、親子・夫婦の不和、仕事上の失敗、経済生活の破綻、転職、病氣、突然の死、交通事故、災難、老いやボケなどの人生終末を襲う危機、どれをとっても好ましいものはない。人は誰もが平穩無事な人生を願うものである。

しかし他方では、人間がいかにしたらより成熟した人間へと成長できるか、また、どのような人間が本当に成熟した人かを考えてみると、先の好ましくない様々の危機・苦難を体験しなければ人間としての成長はないといえよう。V・フランクは、「人間の本质は苦悩する者 ホモ・パチエンス (homo patiens) である」⁽¹⁾と透徹した眼で真実を述べている。この世の矛盾、苦悩を避けて通つては、人間としての手応えのある人生はない。たとえ如何に幸福な人でも、苦難・苦悩の体験なしには自分の幸福を豊かに意味づけることはできない。苦難とは人生で出会う困難な出来事で、危機をはらんでいることが多い。苦難は人間を外側から苦しめるが、苦悩はそれを内面の世界で受け止め苦しむ悩むことをいう⁽²⁾。フランクが人間が苦悩する存在であるというとき、その意味は、そうした内的世界で意味を求めて、苦しむ姿を捉えたものといえよう。ホモ・パチエンスhomo patiensというのは直訳すれば、「苦難を耐え忍んでいる人」であるが、人間はどんな強い人でも、病気にもなれば、いろいろな苦難を受けることもある。また、やがて死を迎えねばならぬ存在である。しかし、どのような苦しみを与えられても、これを精神的に耐え忍ぶことができる。つまり、人間は弱い存在でありながら、精神的には逆に強い存在であることを表そうとする意図が、この表現にはありそうである。

広池も苦難の生涯を送った人である。その広池が他者には自分と同じ道を歩ませぬために、後半生を捧げて道徳学を完成させて、好運命の人が育つことを願った。あたかも聖人が人類の罪を背負って代わりに苦難の道を歩まれたように、広池も「全く一身を生きながら神及び人間社会の前に犠牲として供え」(本論文二)(参照)たのである。

いまその広池の没後五十年を迎えて、我々が真剣に考えなければならぬことは、広池の道徳学を学び自分の幸福をひたすら願うだけでは、人間としての成長はないということではないかと思う⁽³⁾。我々もまた広池とともに苦

難を背負い、人間としての苦悩を真剣に受け止めることが必要であろう。もし他人の苦難をみて高いところに立って批判し裁くだけで終わるとすれば、そういう人がどれだけ道徳実践に励んだとしても、神はそうした自己中心的人間を祝福されるであろうか。我々は広池とともに「苦難を耐え忍ぶ人間」になり、人類の苦悩とともに背負い、自ら手を汚すことが自己の成長につながることをしっかりと確認すべきであろう。

そこで本論文は広池の病気との戦いを顧みて、彼がその苦悩をどのように受け止めたかをたどり、次に、後年の道徳学の中に人間の苦悩がどのように位置づけられているかをみるものである。そして人間は苦悩してはじめて幸福の意味を知るものであり、苦難から離れた幸福は意味がないことを明らかにしたい。

ところで、広池が道徳学を完成したプロセスをみると、道徳研究を志す以前に、宗教団体に入って信仰を求めた一時期があるが、ちょうどその頃、人生最大の危機である死を宣告されるほどの大病にかかり、人間としての最も深い苦悩と戦うこととなった。それが契機となり人間の真実に覚醒し、その後の人生と学問研究に新分野を開くことになった。我々はこの点に深い意味を見出さざるを得ない。彼が大病に襲われた時、四十六歳の人生の絶頂にあり、しかもかねて東京帝国大学に提出してあった学位論文がパスして学位授与の榮譽が与えられたのである。人生の絶頂と最大の危機を同時に迎え、病床にあつて自己の運命を深く自覚するとともに、神によって生かされていることの有り難さを痛感して、残された生命を他者への愛に生きようと決意した。病床で深く自覚めた人間の真実の姿は、どん底体験を経ただけに、我々の胸に迫るものがある。このように病気にあえぎ苦悩する姿がフランクのいうホモ・パチエンスである。

ホモ・パチエンスは聖人―釈迦、孔子、ソクラテス、イエス・キリストの教えに共通する人間観であるといえる⁽⁴⁾。その特質は人間の弱さ・有限性を自覚して謙虚に生きる人間である。すなわち人間の暗い面―無知、病気、

失敗、挫折、醜さ、貧困、罪、老い、死などを人間の中心に見ずえるいわば宗教的人間観ともいえる。

しかし、そうした人間の暗い断面、あるいは危険性は、どのような人間にも、そして何時、いかなる社会にも、その存在を認めることができる。だからこそ、人間は自己の有限性をよく自覚して、誇ることなく、どこまでも謙虚に生きざるを得ない弱い部分を抱えていることに気づかされ、その結果として、他者の弱さ・苦しみ・痛みに鋭く反応し、深い思いやりをもって人を慈しむ心がおのずから湧いてくるのであろう。

したがって、広池の生き方に学ぶにしても、我々と同じ人間としての弱点を抱えつつ生きた、どこにでもいる一人の人間として見てゆく眼が大切である。後年になって彼が完成した道德学の理論および道德的理想論、さらには完成した教育者・教育事業の成功者という光り輝く姿に眼を奪われてしまっただけならならぬ。そうした誰もが評価する成果は、ここで取り上げるような苦悩を踏み台にした多大の努力と神の恩恵によって築かれたものである。広池の原点ともいべき出発点は、人生の半ばで病気によって挫折し、健康への間断なき不安、死の恐怖、家族への愛着と責任感、仕事を放棄することの無念さと中途で人生を変更することの挫折感、社会的非難・中傷への恐れ、こうした人生半ばにある中年の誰もが抱える責任と不安感に押し潰されんばかりの痛々しい弱くてかばそい人間であることを、我々は決して忘れてはならないと思う。だから、筆者はできるだけこうした広池の人間としての痛み、弱さ、葛藤を辿ってみたい。

二、病者の心

広池はその七十二年の生涯のなかですくなくとも数回の病気による危機を体験した。そのなかでも最大のピン

チは、一九二二年（大正元年）九月以降のいわゆる彼自身のいう「大患」であった。資料によってその間の事情をまず簡潔に説明したい。

「博士、積年の努力は大いに日本の学界を感動せしめ、先輩の手によりて各方面に拔擢の榮を見んとする場合、大正元年九月以降、強度の神経衰弱にかかり、日本赤十字社三重県支部の病院に入院せしが、病勢ますます加わりて同年十二月六日の夜に至り医薬の力まったく尽き、衰弱加わりて而眼物を見ることあたわざるに至れり。」

人間が病床にあるとき、誰でも病気からくる痛みと、人生の深淵を覗き見た者のみが見る精神的な苦痛、すなわち孤独、不安、絶望、罪意識、焦燥感にさいなまれる。また病者は、鋭い感性をよびさまして、周囲の環境を鋭く見つめる。しかし、幾多の内面の苦悩と葛藤は、やがて病気を神から与えられた試練だととらえる新しい精神的転機がおとずれる。自分が「生かされている」ことの有り難さを痛感し感謝のうちに運命を受容し他者への大いなる愛に生きようとする積極性が全面にでてくる。このとき、人は苦悩を越えた高次の精神的価値と出会い、生きることの真実の意味を見出すのである。広池の体験もこうした軌跡を描いている。ここにホモ・パチエンスの豊かな人間性をみることができ。それはまた人間の成熟性の発達過程とみることもできる。しかし、そのためには、広池の独力では無理ではなかったかと思う。多くの援助者の差しのべる精神的・物質的手当が必要であったとみるのが当然であろう。また、さらに、長い時間の経過をまたなければならぬ。広池は病気の苦悩を信仰によって克服しようと努力した。その戦いは起伏にとみ歳月を費やして、ようやくにして人格の改造と健康を回復することに成功したのである。

(一) 不安と苦悩

それでは、病床にある広池は人間であることの苦しみをどう受けとめていたのであろうか。それをひとつずつ

みてゆくことにしたい。

人は誰でも明日に希望が持てなくなつたとき、絶望と不安に襲われる。ことに死を意識した者の絶望は他者の窺い知れぬ苦悩に満ちたものと考えられる。広池も例外ではない。大正元年の大病以前に、すでに彼は大病を予期し不安感を持ち続けていた。

「……明治四十年、『古事類苑』の修了を機として、先輩友人の勧告と神宮当局者の懇請とを容れ、一時神宮の御膝下にきたりて奉仕することにいたしました。

職務は神宮皇学館の教授で、授業は一週四、五時間にすぎないのでありました。そこで二見が浦に下宿して白砂青松の間に起臥し、もって心身の静養に努めました。しかしながら、この時に当たっては、全身の神経衰弱すでにその極度に達し、夜間静かに寝に就きて眼を閉する時には、その心身の衰弱を感じることはなほだしく、大患の不日に襲来すべきことを自覚せずにはおられなかつたのであります。ただし肉体の摂生法につきては、従来相当の滋養物を食するのみならず、あらゆる滋養薬を用いかつ健康増進の方法を実行し、いやしくも肉体に害あるものをば極度に節制し、かつ神に対する敬虔無二の信仰を持ち、あらゆる点より肉体の保存を図つてきた結果が右のとおりでありますから、ここに至っては、百計尽きて寒心に堪えざる状態でありました。⁽⁶⁾文中の「百計尽きて寒心に堪えざる状態」というところに引用した要点がある。百計尽きたとは運命の閉塞状況を表現している。また、「寒心」というのは「広辞苑」では「肝をひやすこと。心の恐れを抱いて、ぞつとすること」とある。絶望感がひしひしと伝わってくる感じがする。

また、病気によつてやむを得ずとる休養は他人からみると快適にみえるものであるが、当事者にとつては、大変辛いものであろう。一人取り残されたような焦燥感、孤独感が襲い、むなしさがついてまわる。そんな感情の起伏を次の文章が物語っている。

「十月十三日(前略)学校は十二日までの病氣願ひにて休み居れり。然るに、十三日は自分の時間割りの上の休み、十四日は神御衣祭、十五日は学生桃山参拜のたふれ休み、十六、七日は大祭、十八日は秋季運動会、十九日くたふれ休み、二十日は日曜日なり。実に結構なり。今これを回想するに、自分が健康ならば、かく毎日休みあり、いかに愉快なるや知れず。しかるに昔は生計と出世とのために苦しみて、春の花、秋の月の楽しみもせず。今は職業の方は右のごとく軽くなり、楽になりしも病にて苦しみ、つまり予の一生は苦をもつて始まり、苦をもつて了る有様なり。」

広池はしかし、すでに宗教的信仰の世界に入っていたので、このような焦燥感も孤独感も逃れることのできないう運命として感謝のうちに受容してゆこうとする意欲がみられることはいうまでもない。先の一文に続いて「しかし、ここが即ち立命の要点なり。……今日この病あればこそ、我が心を改めて、今後純然たる世のための働きをする決心を固むることを得るなれ」といった決意を表明している。だが、それはあくまで理論上のことであって、心がただちについていったわけではない。だから焦りが出てくる。

即ち広池の焦りは、自己自身の精神作用が招いた病氣であるから、心の転換をはかることで病氣が克服できるのだという理屈と自分自身の心の実際のメカニズムが合致しないところからくると考えてよい。彼が心のありかたを変えて病気を治したいと考えたのは、宗教家の指導によるからだけではない。広池の病氣は、先に強度の神経衰弱とあつたように、医薬では容易に効力を発揮せず、残された唯一の切り札が、自己自身の心の転換による治療であつた。しかし、身体の病状が悪くなれば、誰しも苦しみから逃れたい、早く治りたいという心の焦りが生じやすいものである。また、自分の心を自分で方向づけ、新境地を開いたはずであるのに、無意識の心は以前

と変わらない。

「大正元年十月十一日(前略) 十一日より、一切心中に埃の心使いをなさず。少々起れば直ちに打ち消す。たとえばじつと仰臥して居って、学位受領後の虚栄心の満足などのことのごとき一切思わず。蓋し人は動物の一種なり。我が輩にして、かかる浅ましき心使いの少しにても起こるということは自分ながら不思議なれど、事実は如何せん、色々つまらぬ虚栄心の満足に付きての考えのおこることあり。子供らし、浅まし。今日よりは一切埃の心使いを廃す。」

「呼、私は信心の最初から己れを捨てて居る貌ではあり、利害関係は一切考えぬという考えであれど、なかなか万事に己れを捨つる心使い、利害を考えぬ心使いができぬので恥すべく、また神様に相すまぬことである。」
「なお、また一つ謝罪す。人様からまだかまだかといわれるれば、心せき立ちて穏やかならず、はやくよくなりたいと思う心あり。」

広池はこうした無心の真心になりきれない、それを妨害する心の働きを「案じ心」といい、これが自己の心の立て替えを邪魔していると考えた。案じ心とは、

「我が身上を案じてすつきり神に御任せすることのできぬ心使い」

「一切をすてて本部に任せたならば、金の不足する時にすべきやとの懸念ありはせぬかと思う。これがあってはならぬと思ひながら、すつきり切れませぬ」

「やはり漸次よくなりつつあるものなり。ただ案じ心のために苦しむと思わる」

「妻の愛着に引かるる埃の心使い」

「死にたくない」、「よくなつて働きたい」

「神に催促する」

などの焦り、不安、思いから来る心の活動である。そこで「案じ心のために色々苦しむことを止めることに決す」と誓つた。しかし、身体が頼みにならぬ時に、心を立て替えることで健康を回復しようとしたのであるが、支えになるはずの精神も案じ心となって、再び病を進行させ、精神の転換を妨げるわけである。まことに人間的苦悩だといわざるを得ない。如何にして人間でありつつけながら、人間としての不安と焦りを取り除くことができるか。精神が唯一の自己救済の手だてであり、同時にその精神活動が救いを妨げているというこの矛盾、悪循環をいかに断ち切るか。無心になることの困難さがここにある。

結局のところ、「案じ心」を止めるということは、「案じ心」を次々と生みだす自己の人間としてのあり方を止めるということである。即ち、過去の人間性を捨てて、新しい人間へと生まれかわつてゆくしかない。信仰は、そのように古い人格に新しい人格を接ぎ木することであるが、接ぎ木されても、長い間に培つて安住してきた古い自己のアイデンティティ(人間のありかた)を捨てることは容易ではない。だからこそ援助者の適切な指導と本人の意欲・向上心及び不断の修行が欠かせない。しかもその上に、超越者の側からの恵みが必要であろう。人間の努力の限界がそこにある。ホモ・パチエンスは謙虚な祈りと、それを受けとめる人間を越えた偉大な存在を要請する。人間は常に有限かつ相対的であるから、苦悩の体験を有し、人間の限界を知つた者は神と出会うのである。しかし、その問題を検討する前に、もっと一人の病人としての広池の心を「罪意識」の点から追つてみたい。

(二) 罪意識

病人の心には必ず「過去の行ないを悔やみ、自分を責める」という罪意識が見られる。しかし過去に対する罪意識に縛られて、未来に前進できないとすると、それは不当かつ絶望につながる間違つた罪意識といえよう。し

かし、罪意識は病者の心を活性化する力にもなれば、妨害していつそう苦悶のなかに拘束して事態を悪化せたりする役割をはたす。ホモ・パチエンスの人間観は、神経症的罪意識を有するペシミスティックな人間では決してない。むしろ、自己を越えた偉大な人間の価値のために自己を捧げようとする積極的な人間である。このことを十分に確認する必要がある。即ちホモ・パチエンスは弱さや限界をバネにして人類への贖罪の精神をもつがゆえに、誰に対しても謙虚で柔らかに生きる人間である。しかし、そうした自己の罪を償うのではなく、ただ罪悪感に縛られた生き方は、低次元の罪意識でしかない。人間医学の提唱者ポール・トゥルニエは、罪意識の構造を研究した第一者である。彼の研究の一端をみてみよう。

「ところで重大なことは、病人が健康な人に対して、特に病人のことを一番心配してくれている人やその人の慰めの言葉に対して、あらわに、あるいはひそかに抱いている反発である。しばしば病人に痛ましい罪意識を呼びさますのは、信心深い訪問者たちである。(中略)また、あらゆる教会、教派の信仰者、牧師や信徒、特に病人を見舞うのにきわめて熱心な人々が、宗教的な証しをして病人を傷つけている例を私たちは知っている。彼らは信ずる者を助けたもう神の力を熱心に説いて、病気になる人は信仰が足りないのだと仄めかしている。病人は、病氣であるということすでに偽りの罪(神経症的罪意識)を感じているのに、今やその上に、さらに重大な宗教的な罪をも負わされるのである。自分のために行われている多くの治療や祈りにもかかわらず病気が治らないのは、罪があるからだという意識、また治らないのは神の恵を与えられる値打ちがないからだという意識、あるいは何かの咎、何か不思議な、自分でも分かっていない何らかの罪があるので治らないのだという意識である。」²⁰⁾

このように病人は必ず過去の人生を後悔して罪の意識に苛まれる。また、援助者もそのように裁きを下したり、追い込みがちである。ポール・トゥルニエは「真の罪」と「偽りの罪」とを、以下のように区別する。すなわち「『偽りの罪』は人間の判断や暗示から出てくるものであり、『真の罪』は神の裁きから出てくるものである」と。彼は、神との人格的出会い、つまり神の無償の愛に出会うことによって、病者ははじめて、己れの罪意識がいかに狭くかつ絶望感と挫折感をもたらす原因であったかを発見するのだという。

さて広池の罪意識には、宗教的信仰との出会いによって自己の運命をいっさい有り難く受容しようとする態度が確立されているといえよう。それでも最初は、信仰と病氣の回復をいわば取引していたとの反省もある。たとえば、

「私は、初めは講演にゆきて神様を拜む時に、人を助くるこの功德によりて我が身を守りたまえと拜めり。近來は、神よ、私は因縁あしきものなり、故に我が身の苦しみはどんなにありても苦しからず、この地方の人々の助かるように、この教会の助かるようにといて拜む」²¹⁾

とあって、取引としての信仰から次第に飛躍したことがうかがえる。『道徳科学の論文』には、さらに次元の高い贖罪の念から出てくる人類への犠牲という心境が述べられている。

「最高道徳においては、かかる場合に当たりては、その人各自に自己の運命を回想し、深く自己に反省して、神に対し人間社会に対して、自己のなすべき義務を忘れ、且つ自己の踏むべき道を踏まず、ついにかかる運命を招きしことを神に向かつて懺悔するのであります。しこうしてこの過去における過失及び罪惡に対してこれを贖わんがために、全く一身を生きながら神及び人間社会の前に犠牲として供するのであります。」²²⁾

このような崇高ともいえる贖罪意識は、人間一人の力を出てくるものではなく、人間を生かし育みかつその精神的成長を支援していると思われる。人間を超越した営み、すなわち神との出会いによって感化され、その結果

生じてくる宗教的精神であろう。そうした宗教的感覚こそが、最高道德の中心にあって、道德的英知を支えているものと考えられる。それを欠けば単なる知的・合理的道德であって、人間の苦悩を救済する力はない。宗教心を非合理であるからと排斥しては、広池の苦悩の体験が生きてこないといわざるを得ない。

(三) 病人の感性

柳田邦男は『「死の医学」への序章』の初めに死を見つめる人々の光りへの感動、目に映る世界への感動が鋭い感性で捉えられていることを報告している。

「それは単なる風景描写や美の探究というよりは、生きることへの感動の投影としての光りに満ちた情景、とりわけ親しい人間への限りないとおしみから湧き出た心象風景というべきものであることがわかってくる。」⁽²⁵⁾
「一日一日が緊迫する。必死になる。その緊迫感が、病いを知らぬ日常の何十倍にも感性を敏感にするにちがいない。光を強烈に感じ、心を動かされるというのは、感性が昂揚していることの一つの表れとみることができないだろうか。」⁽²⁶⁾

このような鋭い感性は病いからくる痛みと死の恐怖がもたらすものであるという。しかし、だからこそ、そのように苦悩の体験者は、回復後、他者の痛みに共感し苦悩を共に背負う姿勢が出てくるのではないか。広池の日記にも周辺への鋭い感覚を確認できる。

「正午、日光浴を取る。その際天地自然の状態を観察し、顧みて宇宙の真理に想到す。(中略)熟々天地自然の現象を観よ。花あり、月あり、山川草木の景色あり。実に美なり。稲の穂、大根の葉、蒸々として熟成す。真に善なり。しかし其の間に糞土あり、曲路経路あり、不毛の地あり、朽枯せる草木あり。しかもこれらの糞土や、曲路経路や、不毛の地や朽枯せる草木は、やはり自然の美をあやどりて、我が心を樂しむ材料となり、ま

たこれが善美の現象を生成する原動力となるものなり。故にしたがって吾人は、これに對して痛切に醜惡の情を起こさず。(中略)見よ、神はこの森羅万象を包括して喜憂するところなく、自然の法則は悠々として迫らず。」⁽²⁶⁾
広池はすでにこのような善と悪を超越してゆく態度を学んでいたことがわかる。しかし、自分の病氣も、明言されてはいないが、ここでいう「不毛の地」、「朽枯せる草木」に属し、「花」や「月」とは架け離れたものではないかという疑念が一瞬わき上ったのではないかと推察される。

次に宗教者の援助をどのように迎えていたかを見てみよう。援助者への信頼が絶大なるときは、実に柔らかにその助言を受け止めていることがわかる。

「夕刻、三河の世古口イノ子さん、信徒を引率して威勢よく参拜し来る。……また悪いのですか、何と心得て居らるるのですか、人間心から見れば叱るような笑うような口調にていわる。イノ子さんは通称おタカさんといひ……本年六十四歳、貞淑穩雅の姿態、人を引き付ける力に富む。数ならぬ子のことを常に深く思うてくれるので、予もまた肉親の叔母のごとき感あり。数日前より、予は胸中ひそかにその相見ることを得るの近日に在ることを思うて楽しんで居りましたから、今その声を聞きてうれしく感じました。(中略)これがほかの人の御話であったならば、予はかえって心中に不満を抱くに至るかも知れぬが、イノ子さんの御話は峻烈なれど、どこか角がない、温かい柔らかいところがあると見えて、予は喜んで服せずには居られぬので、唯々としてこれに従い、心中感謝を禁じ得なかつた。」⁽²⁷⁾

このように、病人は信頼と感謝によって助言を受け入れる場合と、以下の例のようにかえって反発する場合とがある。見当違いの助言や建前の押しつけはかえって病人の反発をかうのみである。病人の鋭い感性を配慮することが必要であろう。

「……予のごとき数十年奮闘活動して、精力を使い切りたる病人に対しては、余程深き注意をもって教理を説かねば、かえってその人の心をくさらせ、御道に反対する心を生ぜしむべし。同じ肺病もしくは重き脳病に苦しめる人にも、その人の経歴、習慣、生活の程度次第では、教理の説き方大いに異なるべし。その人の経歴、習慣、生活の程度は、即ちその人の因縁なり。その人の因縁を調べずして、無法にも千遍一律の教理を説きて無理をさせたらば、かえってその人の心を傷め、或いは反対心を生ぜしむるに至るのみならず、往々これがために、その人を殺すに至るべし。これ教導職に、誠心誠意のほか相当の教育を要求する所以なり」⁽²⁸⁾

「……然るに浅薄なる信者にては、かかることをば知らず、ただ平素健康強壯の人のちよつと風邪か何かに犯されたる人に向かいて説くような教理を、予に向かいても説く人あれど、これは大いに誤りなり」⁽²⁹⁾

病人に最も必要なことは人生（病気を含めて）をありのままに受容する勇氣をもつことである。病気を単に身体故障という部分的問題に限定せず、人間のあり方を基本的に改め、病気という挫折、失敗、苦悩に新しい意味づけができるように援助することが必要である。たとえ治療の見込みのない難病であっても、病気を恩寵・受難（passion）と認識できれば素晴らしい力を發揮することがある⁽³⁰⁾。したがって、ともすれば氣力を失い掛けがちな病人を勇氣づけることが援助者の使命と考えられる。その時、病人の鋭い感性を逆撫でしたり、自己の理屈を押し付けたりしてはならない。病人への「惻隱の情」はホモ・パチエンスの人間観の中心的課題である。

三、ホモ・パチエンスの構造と課題

健康に恵まれ順調な生活を送ることのできる人は幸いである。しかし、人間の健康は絶対的なものではない。むしろこわれやすく弱い。だから健康は神仏の恵みである。長い一生の間には誰もが病気の危機を体験する。一

生涯難病に冒され、人間としての自由を完全に奪われてしまう人もある。

病は人間の心をも蝕む。心の病気といっても、決して精神病などを意味しているのではない。むしろ人格の破綻ともいえるべき挫折感、失敗から生きる氣力を失い、アルコール依存症になったり、自分の人生を受容できずに逃避したり、諦めたりするような、人生に光を見失った状態にある人のことである。広池は病床中の日記に「不安、煩悶、鬱憂、愁傷の中に呻吟して居るものは助からぬ人である」⁽³¹⁾と心の病気の様子を述べている。

さらに、経済の破綻も人間を蝕む病気の一つである。豊かな国の人も貧しい国の人も、共に経済的困窮に陥ることがある。経済の破綻ではなく人間の破綻であるからであろう。人間としての生き方を見失うと、金銭・物質が人間を圧倒して、人間は経済病に冒される。現代社会はホモ・パチエンスの人間観を容れることが出来ない、機能的・効率的・能率的・功利的社会であるために、人々は自らの命を削っても、また人格的価値を放棄しても経済の豊かさを追及しようとする。以上のうち、心の病い、経済の病いは、人間の苦―「生・老・病・死」に加えるべき普遍的現象である。

広池は人間の三つの病を重視し次のように説いている。

「人間には、精神、経済、肉体を蝕む三つの病がある。そのうち精神、経済の病の予防薬としてモラロジーをつくった。残る肉体の病を防ぐのが、この谷川温泉である。これで、やっと年来の宿願である人心救済のお膳立てが出来た。」⁽³²⁾

広池の創建した独自の体系をもつ道徳学モラロジーはそうした人間の苦悩を癒し、その心を救済する力をもつた「抜苦与楽」を目的としたものである。だからホモ・パチエンスの人間観がその根底に見据えられていることはいままでもない。彼の提唱になる「最高道徳」⁽³³⁾も、その趣旨にそって解釈すれば、自らを最高に位置づけよう

とする高ぶった心とは異なり、むしろ、反対に人間としてのどん底体験をした者として、いかにすれば、人間の深い苦悩を救うことが出来るかという点に狙いがあるといえよう。即ち最高とは最低のどん底にいる者がはるか彼方に見い出した神からの救済の一筋の光を尊称した表現であると解釈できないであろうか。

(一) V・フランクルの苦悩論

広池のホモ・パチエンスの人間観をさらに掘り下げるために、われわれはフランクル (V. Frankl) の *Homo Patiens, Versuch einer Pathologie* (苦悩の人―苦悩弁神論の試み、一九五一年。邦訳『苦悩の存在論』真行寺功訳、新泉社、一九七二年) に学ぶことが必要であろう。ことに三つの要点を取り上げたい。

第一のポイントは、フランクルが価値実現の三つの方法の一つに苦悩することを位置づけて、その意味を解明していることである⁽³⁴⁾。即ち価値実現の第一の可能性は、「創造的価値」であって、何かを生産したり、製作することに実現される。この時、人々はもっている才能を活用する。第二の方法はすてにつくられ、存在するもの、存在の美なり真理なりを鑑賞することによる「体験的価値」の実現である。この場合、人々はそれ相当の器官を用いる。音楽を聞くために耳を、美しい景色を見るために眼が用いられる。第三の方法は自分の置かれた運命や境遇を甘んじて引き受けるところに存在する「態度価値」の実現である。ちなみに、広池の「最高道徳」は、完全な精神的価値の実現を意味しており、心づかいのみで実践するという点でまさしくフランクルのいう「態度価値」の実現である。

フランクルはこの最後の態度価値の実現が「一つの業績」ともみるべき意味を有しているという。なぜなら、自己の病気の結果、さまざまな行動や自己実現の機会を奪われながら、「この余儀なくされた後退をば、変転して、自己実現と価値実現の可能性へと前進させた」⁽³⁵⁾からである。つまり、わかりやすくいえば、病気のハンディ

を自己のバツション(受難)、自分の十字架としてうけとめ、その病気から何かを作り出したのである。いったい何を作り出したというのか。即ち自己の内面を高い次元へと成長させ、道徳化――現在の自分自身を越えて高まってゆくところに、成長、成熟が見られるというのである。そうした内面の自由と価値実現の仕方を見ると、創造価値と体験価値の実現の仕方が常に、物や道具や状況が必要であるのに対して、態度価値は全くそれらの条件から解放されて自由であることに特色が見られる。

このように、人間は苦悩を通じて成長し、成熟し、道徳的に尊厳な存在へと上昇してゆく。その意味で、人間は苦悩する者だけが人間の本質を実現させ、真理へと開かれてゆく。運命から逃避せず、与えられた苦悩の運命を引き受ける能力、不屈の精神に、最も豊かな人間性が現れるとみている。

第二のポイントは、人間は苦悩を引き受け、受容することによって成長するということは、人間は苦悩を志向しなければならぬ。そこで、苦悩にも、意味豊かな必要な苦悩と意味のない不必要な苦悩、たとえばマゾヒズムに転化されやすい苦悩とがあり、この両者を厳しく区別すべき点である。結論からいえば、「正しい、毅然とした苦悩こそが真の苦悩である」⁽³⁶⁾という。マゾヒズムは「苦悩を自己目的」とするが、「意味豊かな苦悩」は「……のための苦悩」であり、「苦悩するところの者」のために目指すように命ずる。一言でいえば、意味豊かな苦悩はすぐれて犠牲である」という。

なぜ筆者が意味のある苦悩と意味のない苦悩を区別することに関心を持ったかを告白せねばならない。人々は誰でも自分が苦悩することが他者のためになり、犠牲になることが意味あることとなれば、特別な人でなくても喜んで苦悩を引き受けるに違いない。勿論苦悩の程度も問題であろう。しかし、苦悩を志向するうちに、知らぬまに苦悩になれて、苦悩してないと生き甲斐や生きていることの手応えを感じなくなる。これがマゾヒズムの

恐ろしきといえよう。また、道徳実践のプロセスの中で、苦悩だけが大きく取り上げられてしまうことにも問題がある。その結果、老いて第一線を退いた人の中で、たとえば他人の援助なしに生きてゆけぬ場合に、自分のための苦悩ということに意味づけが出来ず、虚しき、焦りを感じることもある。苦悩する人間の理念は苦悩から脱皮してこれを克服する成功談だけが苦悩を意味づけていない。苦悩に耐えること、直る見込みのない難病にも人間としての尊厳な態度で生き抜くところに価値を見いだす。だからといって、苦悩だけが価値あることと考えてしまうと、マゾヒズムに陥ったり、また、苦悩のない人生に苦悩して生き甲斐を見失うことすらあるところに、人間の苦悩の問題のむずかしさがある。

広池の道徳学は人間への深い慈愛を道徳の中心に見据える人間学的な道徳学でありながら、他方で、人間を越えた宇宙的、超越的存在に向かう開かれた人間学である。これと同様に、フランクもニヒリズムを止揚する人間学即ち「人間の存在論は開かれて、すなわち世界と超世界に向かつて開かれていなければならぬ。それは超越への扉を開けておかなければならない。しかも開かれた扉からは絶対者の影が差し込んでくる」ことを期待する、超越的人間学が基本となる。

そこで筆者が最も興味を持つ第三の点は、そのような人間学を越える自己超越の論理と心理である。フランクはいう。「事物に価値と意味が与えられるのは……だれかのために犠牲として供せられうるその程度に依じてである。」「わたしが放さず固持しているものは、じつは価値を持っておらず、わたしが犠牲に供するものが価値を保持している。」「人間に要請されることは、それは、すべてを引き渡し、放棄し、犠牲にする覚悟である。それゆえ、これは無条件に犠牲になる覚悟である。」⁽³⁸⁾

以上、引用文にみるごとく、人間の真実の姿は自己犠牲、すなわち自己より偉大な価値があることを認め、その価値のために自己の一切を犠牲として捧げることによって、その存在を証明する。そこに人間の価値があり、苦悩する人間こそがそうした自己を犠牲に供することができ、その結果、高い価値の存在を証するところ、フランクのホモ・パチエンスの要旨があると考えることができる。広池の人間学的道徳学とフランクの人間学には、このように超越性を認める点で近いものがある半面、違いもまたある。広池の道徳学はきわめて実践的で、自己犠牲の内容をさらに具体化している。「人心開発救済」⁽³⁹⁾というのがそれである。

(二) 広池におけるホモ・パチエンスとホモ・サピエンス

以上述べたことから明らかなように、ホモ・パチエンスの人間を広池に従って解釈すれば、人間は一人で生きているのではなく、恩恵とか恵み(神と伝統)によって生かされて生きている存在であることを謙虚に認め、神仏にすがりつつ、己れの心の立て替え(欲心から無心)をはかり神(自然の法則)を基準にして誠実に生きようとする人間である。これと対比されるのはホモ・サピエンス *homo sapiens* すなわち知的・合理的人間である。⁽⁴⁰⁾ 広池は、科学技術の興隆とともに知的・合理的人間が増大し、その結果、信仰がますます衰退して、欲に飢えた人間が目先の利益をかちえるために激しく競争し、自己はもとより、他者および第三者にも多大の被害を与え、ついには平和を妨げ、人類を不幸に導くことを恐れたのである。そこで、「道徳を行う者は榮え、然らざるものは亡ぶ」ことを確固として科学的に証明することをもって、ホモ・サピエンスの救済に当たろうとしたのである。道徳科学モラロジーの創建はその点に動機づけがある。⁽⁴¹⁾

広池の道徳学は、その理想である最高道徳的人間すなわちここで述べるホモ・パチエンスの人間の特徴を明らかにしている。次の格言はその内容をよく言い表わしているようである。

「自ら苦勞してこれを人に分かつ」⁽⁴²⁾

（苦勞・困難を自分から求めこれを背負って、積極的に生きるとともに、その結果を他者に譲るといふ生き方）

「自ら運命の責めを負うて感謝す」⁽⁴³⁾

（人生の苦難に遭遇したとき、決して自暴自棄に陥ることなく、自分の運命の立て替への好機と思ひ、感謝の心で受容する）

「苦悶の中に自暴自棄せず」⁽⁴⁴⁾

（どのように苦難・苦悩する問題に直面しても、自分の責任としてこれを受け止め、謙虚に自己を見つめて神からの試練として前向きに生きる）

「盛時にはおごらず衰時には悲しまず」⁽⁴⁵⁾

（栄枯盛衰は世の常であり、どんなときでも冷静に生きること）

「大事には能く耐え小事には怒らず」⁽⁴⁶⁾

（人生を左右する重大問題には、慎重かつ粘り強く時間をかけて解決し、些細な感情に走らず、至誠をもつて当たる）

「我これを為すにあらずただこれに服するのみ」⁽⁴⁷⁾

（自分の知識・力を過信せず、神・恩人のお陰と感謝して、罪を償ひ、犠牲を払う心で努力すること）

「慈悲寛大自己反省」⁽⁴⁸⁾

（神・伝統の心そのままに人類救済の使命感をもって、一切を自己に反省しひたすら、低い、優しい、温かい慈悲の精神で生きる）

以上の格言で知られるように、ホモ・パチエンスの人間は運命を受容し耐え忍びつつ、結果的に運命を開拓する、ねばり強くかつ柔らかな生き方をとる。だからつねに「安心立命」の心境を開いている。「広辞苑」によれば、「安心」とは「心配・不安がなくて、心が安らかなこと」であり、「立命」とは「身を天に任せ、生死利害に処して泰然たる」生き方であると説明されている。

これに対して、科学技術時代に社会をリードするホモ・サピエンス、知的・合理的人間の特色を池をどう見ていたであろうか。彼等はいまもつばら政策・手段に訴えて、効率・能率を重んじ、失敗・挫折すれば悲観するだけで、安心立命がない。仏教でいう修羅道（互いに争って共に苦しむ社会）及び餓鬼道（リーダーは貧欲で大衆はこれを羨望して争う社会）のごとき有様だといふのである。⁽⁴⁹⁾

池が指摘するホモ・サピエンスの欠陥は次のとおりである。

- 1 「現代人は自我の念強きが故にみだりに自己の力を過信し、神を信せず、聖人の教えを敬わず、ごう然として人生を突破せんとする弊あること」
- 2 「みだりにその眼前の利己主義に出発する知育に偏依して自己及び他人を物質的にのみ開発せんとする弊あること」
- 3 「みだりにその眼前の利己主義より出発して速成的に自己の味方を造らんとして弱きを扶け強きに背くこと」
- 4 「右と同様の理由によりて内部の統一を忘れて外部に親しむ弊あること」⁽⁵⁰⁾

要するに、知的・合理的人間は自己の知力・学識、権力・物質等の力を過信し、「利己的・政策的・交際的・狂奔的・且つ事業的に行動する」⁽⁵¹⁾ から安心立命の人生をおくることはできない。これに対して、ホモ・パチエンス

的人間は次の広池の言葉にみるように、自己を過信せず、ひたすら神を信じて行動する人間である。

「私はまことに知・徳不足の者でありますから、常にその心身を諸聖人の教えの中に入れていただき、全くその教えを被り、身も心も聖人の心に噛み砕かれ、聖人の心に同化させていただき、その教えのまにまに働かせていただいております。故にいささか今日あるを致したのであります。しかるに今人はその知識多きがために、ごう慢にして、聖人の知徳に対してもこれを自己の小知によりて判断し、その利己心に合するものだけを利用せんとするものであります。故に真の幸福もなく且つ真の安心も出来ぬのであります。」⁽²²⁾

また、知的・合理的人間は病氣・挫折・失敗した時には、なぜ自分が苦難を受けるのかこれを内面的に反省したり苦惱して謙虚に受け止めることがなく、もっぱら技術と政策で切りぬけようとする。さらに、他者の苦難にも冷たく反応するのみで、何等、精神的成長がみられないのである。

さて、広池は単に知的・合理的人間を批判しているだけではない。むしろその精神を開発救済してゆこうと考えたのである。なぜなら、時代はますます技術文明化し、高度な知識を操る人間が必要であるからである。したがって、新時代を切り開くにふさわしい知識と技術をさらに活用するためにも、その心を救済して、欲望の満足求めて狂奔することがない、平和と真実の人間を育成することに全力を傾け、これをモラロジー教育の目的に据えたのである。⁽²³⁾

だから、モラロジーによる開発救済の主たる対象は古い意識を持つ人々（たとえば因習と迷信に拘束されていること）よりも、むしろ、新しい時代の担い手たるホモ・サピエンス即ち知的・合理的人間である。だがそうした開発の対象たるホモ・サピエンスと開発して育てるべき目標となるホモ・パチエンスとの距離は大変遠く、その間に掛け橋をかけることは容易ではない。むしろ時に逆転が起こり、知的・合理的人間が宗教的色彩を帯びた

ホモ・パチエンスの人間を批判して、その意識体質の古さを指摘することもある。教育のむずかしさは理念ではなく、誰がそれを推進するかという点に求められる。

広池は先の大戦をすでに早くから予期していた。すでに当時の教育が人間教育を忘れて知育に傾き、人間の欲望を満たすためには生命をも捨てることを教えていたからである。精神的には欲望を持ち、最新の技術（兵器）をふりまわす人間が日本を支配していた。そうした人間はやがて他国を侵略し戦争を引き起こして結局は自国を滅ぼすに違いないと広池は確信していた。だから彼のモラロジー教育は切迫した課題を担っていたのである。それでも広池は泰然と道を説き、将来の日本を担うであろう青年の教育に全力を投下したのである。ホモ・パチエンスの人間が最後には勝利を収めることを確信していたからである。それは、広池の後半生の苦難の人生の結論であったからでもある。

まことに、広池こそホモ・パチエンスの人間のお手本といわねばならない。しかも彼は科学的・合理的思考の持ち主である。広池の人格には、宗教性と科学的合理性とが、いわば結晶となって見事に統合されている。技術文明時代の人間にふさわしいモデルといえよう。しかし、そうした近代的、科学的人格が生み出した新しい時代の新しい道徳学も、その生命となっているのは、彼自身の苦悩の人生体験である。次ぎの文章にその趣旨を窺うことができる。

「私は幼少のころより不幸にして非常なる辛酸を嘗め、且つ学問ようやく成熟の暁に、大患に襲われて一切をなげうたざるべからざる悲境に陥り、幸いにしてわずかに生命は繋ぎ得たるも、百難併せ至り、もって今日に及んでおるのであります。故に、このモラロジーの最初の著書たる本書に述ぶるところの最高道徳は、ことごとく私の過去において実行させていただいたところのことであります。すなわち当該最高道徳は、科学的研究

のほか、私が過去において『こういうときにはどうしたならば真に幸福になり得るか』というように、あらゆる危機に臨んだ際に、聖人の心に合致して救済されようと企図したところの事跡に基づいた記事でありますから、一言一句といえども漫然たる私の思索の結果を述べたものではなく、確固たる人間生活の法則を開示せるものであるのです。故にその内容には千万無量の意味を含蓄しておるのであります。されば、モラロジは一つの科学として、他の科学と同じく、ある事実の説明にすぎざれど、ひとたびその意義を体得し船親ら実行せんとする御方にたいして、その御方の学問・知識・経験及び積徳の深淺にしたがってその味わいが異なってくるのであります。読者深くこの一言を脳裏に御印象の上御熟覧くだされたし。』

上の一文は「モラロジの生命」と題するものであるが、本論文の趣旨からいえば、「その内容に千万無量の意味を含蓄している」から「その味わいが異なってくる」という箇所に格別の興味をいだかざるを得ない。一人ひとりの独自の人生を考えてみると、このような表現となるのであろうか。人間の深みを痛感する次第である。そして「モラロジの生命」を継承するとは、明らかにホモ・パチエンス的人間観を受け入れ、自らも苦難を引きうけることである。

四、結び

人間には強さも弱さも備わっている。人間は病んで苦悩する弱い存在でありながら、人間の限界を悟って、その弱さをバネにして、神の慈愛によって生かされていることに目覚め、人心開発という積極的な生き方に転ずることが出来る。ここに人間の強さがある。苦悩する人間は自己の運命を受容しつつ、これを改善して、手応えある人生を開拓する。風雪に耐える竹はしなやかで強い。ちょうど水墨画のように、余白（余力）を残しつつ、人生に つつましく彩りを添える生き方に似ている。

これに対して、技術文明時代の人間は身につけた武器ともいうべき最新の知識と情報を駆使して、欲望を満たすため、他者はもとより、ときには自分の生命すら捨てても、成功を勝ち得ようとする。苦悩する人間の生き方が水墨画だとすれば、技術文明時代に期待される人間は、キャンバス一杯に余白なしにせい一杯かきなぐる油絵に似ているといえないであらうか。知的・合理的人間に必要なことは、内面の弱さに気づくとともに、他者の痛み・苦悩に鋭く反応することの出来るホモ・パチエンスを内面化することである。

現代社会は技術文明の欠陥を埋めることのできる成熟社会であることが求められているといえよう。ことに人間であることの意味、人間としての生き方が鋭く問われている。現代ほど、人間の苦悩をおもいやることの必要性が問題となったことはない。政治・経済はもとより医療にも、また教育にも、また老いの問題、死の問題にも、豊かな人間性を追及することが問われている。広池の人間観の根底にあるホモ・パチエンスは、人間中心の成熟社会を築くうえで欠かせない重要な問題を内包している。今後いっそう多様な面での具体的な掘り下げがまたれる。没後五十年を迎えて、そのことを痛感する次第である。

〈注〉

(1) Victor E. Frankl: *Homo Patiens Versuch einer Pathod.*

izee, 1951 (邦訳本 真行寺功訳『苦悩の存在論』新泉社

一九七二年) 一一二ページ

(2) 井上英治「苦と実存的出会い」(上智大学人間学会『紀

要』六号) 一六ページ

なお、四苦八苦という言葉があるが、これは元来仏教に由来する語で、生老病死の四苦に愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦の四つを加えたもの。中村元氏によ

(51) 同上四二二ページ。

(52) 同上四一八―一九ページ。

(53) 広池は「古來中國及び日本にては、仏教の慈悲を「抜苦与樂」(くるしみをぬきて、たのしみをあたう)と解して」いたことに深い意味を見出していた。(『新版道徳科学の論文』第七冊七八ページ) いったい誰の苦しみを抜き楽しみを与えようとしたのか。近代西洋の合理的思想は新しい欲望を生じさせ、内面の葛藤・歪み・抗争を生み出した。そこでその苦悩を救い、真実の喜びを与えようとしたといえる。

(54) 『新版道徳科学の論文』第一冊序文一〇二ページ。

(55) ホモ・パチエンス的人間教育の必要性を提言した資料としては、日本経済調査協議会編『新しい産業社会における人間形成』(東洋経済新報社昭四七年刊)がある。その中で、主査をつとめた平塚益徳氏は「……ホモ・パチエンスは宗教的側面である『人間が病人である』ということの自覚は、わが国の教育の中に大きな柱としていなければならない。この人間観は自己の足らざることの自覚に始まる謙虚さ、精進、他者に対する恕、さらに崇高なるものへの畏敬の精神活動として展開する。ところがこのパチエンスという教育は、日本では一番たりないのである。」と説いている。(同書一二二ページ)

(56) モラロジー教育では老人への尊敬やおもいやりを道徳

実践の重要課題と教えてはいるが、その理論の成立期には能率・効率性が重んじられており、さらに、平均寿命も五十歳であったことから「五十歳以上の人を開発してもムダである」ということも言われた。即ちこのことは、「老人問題を十分に展開する社会的条件が整ってはいなかったことを示すものといえよう。今日の長寿時代にふさわしい道徳教育論を基本的にならねばならない。」